

丸瀬布の自然を楽しむための ヒグマ対策

——意外と身近なヒグマを知ってみよう——

丸瀬布「いこいの森」／マウレ山荘／遠軽町



文責: 岩井 基樹

プロローグ：クマって、人里や街の近くにいるの？

「います」——これがありのままの答えです。

2011年には札幌のクマ騒動がメディアを賑わし記憶に新しいですが、150万都市の近隣の山でもヒグマは普通に暮らし、条件が揃えば市街地に出てきたりします。札幌以外でも、近年、北海道内各地でヒグマが市街地周辺に出没したりする例が増えています。どうして？クマが増えたから？——いえ、ヒグマの数はおそらく全道で緩やかな増加傾向ですが、ヒグマの数と昨今の市街地出沒・降里・降農地の因果関係は薄いと考えられます。

その原因は一つや二つではありませんが、人里への出沒増で最も疑われる大きな要素として三つあげられます。

1. 狩猟者の高齢化・減少あるいはクマ撃ちの不在などによって、ヒグマから警戒心が薄らいでいる。
2. 無闇なヒグマの捕獲によって人里周辺のヒグマの社会構成が変わり、人里周りで若グマが増えている。
3. 人里内の農地が、牧草地からクマの好物であるコーン類に変化している。

札幌などの発展都市タイプでは、ヒグマの生息地に食い込むように住宅地が広がっていく傾向があるでしょうし、地方では、過疎化・高齢化などから手入れされない藪などが増え、人里と山の境界線が曖昧になってきている現状もあります。ですから、北海道のクマの市街地・人里への出沒と言っても、いろんなタイプがあります。ただ、直接的には、警戒心の薄いクマが増え、なおかつ人里内の整備が足りず無防備なエサ場があれば、ヒグマはそのエサ場をめざして降りて来るようになってしまいます。

中山間地域の丸瀬布～白滝にかけての北大雪と呼ばれる山塊は広大で、現在の北海道にあってなお豊かなヒグマの大生息地になっています。ヒグマの生息数で言えば、知床半島全体より多いのではないのでしょうか。人里は湧別川本流・武利川・丸瀬布川・支湧別川の河岸段丘に沿って、その山に入り込んでいますから、それぞれの人里・農地帯は「ヒグマの生息地に囲まれている」と表現しても間違っていないと思います。ですから、「近くにはクマはいませんよ」とは、どう転んでも言えない現実があり、ここ8年ほどのヒグマの調査活動によっても、そのありようもはっきりしてきました。

それで、観光客の皆さんには、ヒグマの餌付けにならないように特に「ゴミを捨てないで」という言い方になりますし、農家の皆さんには「農地をしっかりと防除してクマが降りて来ないように」という言い方に、そして駆除をおこなう鳥獣行政に対しては「むやみにクマを殺さないように」という言い方になります。

ただ、この山が豊かで広大なのは確かですが、北海道内の中山間地域に限らず、どんな場所でもほとんどヒグマの活動が周辺に見られます。キャンプ場などにヒグマの足跡が残されていることも道内では珍しくないわけですが、丸瀬布「いこいの森」では、ヒグマも含めた野生動物対策に2010年から本格的に乗り出していて、先進的手法で道内で最も安全なキャンプ場のひとつとして運営がめざされています。

「いこいの森」内は高いレベルで安全性が確保された場所ですが、周辺の山はヒグマの生息地ですし、ちょ



平成22年10月17日撮影 斜里町役場提供



っと歩けばヒグマを見ることがもできます。ネガティブに言えば、遭遇する可能性があります。ただ、「いこいの森」周辺のクマに関しては、ヒトが近づいたら速やかに逃げるように一定の教育が継続的におこなわれつつ、危険度の高い個体の把握に努められているため、ヒト側が慌てて間違った行動をとりさえしなければ、周辺の山でヒグマと遭遇したら即危険という状況はほとんどなくなっています。「いこいの森」東西の山数km以内で、毎年ヒグマの目撃・遭遇は30～50例ほどはありますが、それでヒグマに攻撃されたり、逆にじゃれつかれたりして怪我をした人は過去に例がありません。ヒグマは、エサさえ悪く絡んでいなければ、必ずしも「遇ったら終わり」「近くに暮らしていたら危険」という野生動物ではありませんので、そこを誤解しないようにお願いしつつ、いくつかの点に特に注意していただければと思います。

このパンフレットは、それを安全に実践できるよう、このエリアのヒグマの継続調査・観察からヒグマの活動状況・年齢層・性別、さらに植生や遭遇パターンなどを加味し、最適化されて書かれています。

ほかの地方同様、丸瀬布「いこいの森」周辺の山はヒグマの生息地という意識を持っていただき、このパンフレットを参考に必要なことを必要なだけ注意して、この豊かな山を楽しんでいただければ幸いです。

ヒグマって、どんな暮らし？

「くう・ねる・あそぶ」的な暮らし

■「くう」食う

「くう」というのは食べることですが、ヒグマは単に図体が大きいだけでなく、冬眠を控えているので8月からは冬に向けて「食い溜め」をしなければいけません。さらに、ちょっと専門的になりますが、お腹に仔熊を宿した母グマは、夏から秋にかけて十分食べないと流産してしまうともとれる生態(着床遅延)があり、どうしても食べなければならぬ事情が幾つも重なっています。ですから、ヒグマは食物に左右されて活動場所や行動を変化させます。現在の遠軽町では、河川の中～下流部に堰堤やダムがあってサケやカラフトマスの遡上が阻害されていますから、8月以降の「食い溜め」がなかなか思うようにいかない現実もあると考えられます。



(↑)6月・7月のクマの主食はフキ。この時期には、まだ若いクマが山間部の林道・町道沿いで沿いでフキを食べる姿も、比較的好く見られます。

要するに、ヒグマは「食いしん坊」にならざるを得ない野生動物なので、私たち人間としては、この動物のその点を認めてやり、そこから、どうやったらいろいろな問題や悶着を解消し、この動物と折り合いをつけられるかを考えなくてはなりません。

食物によって、ヒグマの行動パターンは決まりますが、その際、いろいろな経験と学習によって、その季節季節の暮らしを送るようになります。特に人為物(ポイ捨てのゴミ・コンポスト・農作物など)を食べて学習したクマには「常習性」と「執着」が見られるのが普通で、場合によっては警戒心が薄れ「行動のエスカレート」に発展するため危険です。大正の北海道・苫前の三毛別事件、カムチャッカの星野道夫の死、どちらも、もともと危険なクマがいたわけではなく、人がコーンなどの人為物で餌付けをしてエスカレートまで起こさせてしまったクマと考えられています。

【北大雪山塊のヒグマの年周期】

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
ヒグマの食・活動	冬眠明け(オス・早、メス・遅)			交尾期						冬眠穴入り	→?	
	エゾシカ(自然死)	エゾシカ駆除・回収不能個体・残滓 / 交通事故死骸							狩猟残滓・回収漏れ			
	フキの根・トウ・新芽類	草本類(イラクサ・シヤクなどフキ以外の草本)										
		フキ(林道・沢沿い)										
		昆虫類										
		小麦										
		デントコーン										
		木の実(ヤマブドウ・コクワ・マタタビ・ナナカマド類)										
欠落要素					カラフトマス							
					シロザケ							
人間活動	山菜採り(フキ・トウ・タランボなど)				夏休み(釣り・キャンプ・昆虫採集)				秋の行楽・キノコ採り・木の実採り			
		山菜採り(ウド・タケノコ・アイヌネギなど)										

上の表が、おおむね丸瀬布周辺のヒグマの食物の季節変化ですが、この食物変化によってヒグマの活動場所も変化します。

上の図からわかるように、5月の連休は山菜採りの人が山菜の新芽が出ている斜面などで多くヒグマに遭遇し、その後、6月・7月には道沿いのフキを食べに降りておるクマを見かける機会が多くなっていますが、日中の気温が上昇するとともに、涼しい溪流周りにヒグマが活動する傾向も見られ、溪流釣りの人などもクマを見るケースが増えます。8月・9月は人里の農地周りで目撃・遭遇が増え、それ以降は木の実やキノコを採りに山に入る人の遭遇がある、というのが大まかな年周期です。

特に現在の遠軽町あるいは丸瀬布で注意すべき点は次の二点でしょう。

□シカ死骸からは即撤退!



近年の道内では比較的シカの生息数が多く、丸瀬布も例外ではありません。交通事故も含めいくつかの理由でシカの死骸が人里周りに生じがちですが、もし、シカの死骸に出くわした場合は、それがどんな形でも興味本位で近づくことなく、速やかに来た道をそのまま戻ってください。迂回して通り過ぎるのも危険です。

ヒグマはシカの肉が大好物です。一度に食べきれないため土・草などをかけて温存し、近くに潜むことも多く、仮にそうでなくても、シカのにおいで接近してきている可能性があります。シカ死骸周辺では、ふだん穏やかなヒグマでも神経質になり、場合によっては攻撃性が現れます。シカ死骸から半径100m以内では「非常に危険」と表現できるレベルと思われ、半径数百メートル以内でも、複数のヒグマが同時に寄ってきているため通常のヒグマの行動をとらず、人に対しても攻撃的になる場合があります。また、ヒグマ同士の争いも起きやすくなり、手負いの個体も生じがちになります。

シカの死骸は目で見て発見するより、慣れればにおいで感知することのほうが多いですが、とにかく異臭を感じたら、風向きを考えてその異臭の場所(方向)を推測し、早い段階で遠ざかるよう行動するのが原則です。丸瀬布では、ヒグマ駆除用の罠(ネズミ取り式)にもシカ肉が誘因餌として用いられ、場合によっては周辺にまかれますので、一般の方が興味本位で近づくのは厳禁です。

※「いこいの森」近隣では、現在、ヒグマ用罠の設置を原則として控えてもらっています。

□視界の悪いコーン畑周辺は要注意

遠軽町では、農地のクマに対する防備（防除）が無い場合、8月・9月は特にデントコーン畑が多く、ヒグマの主たるエサ場となっています。特に夕方から早朝にかけては、ヒグマたちがそのエサ場への通勤・通学のようには行き来する時間帯なので、近隣では注意が必要です。日中でも、デントコーン畑の中や近隣のちょっとした藪に隠れて休憩しているヒグマも多いため、特に畑の裏側には回り込まないのが無難です。釣りなどで、デントコーン畑を背負ったような形で溪流を遡行するのは、特に朝夕は控えましょう。



（←）デントコーン畑から朝帰りのヒグマ。

北海道では、残念なことに、ヒグマに関してあまりに誤認が多いように思います。「いこいの森」近隣の山では、ヒグマをはじめとする野生動物の調査の一環としてデジタルセンサーカメラを導入し（カメラトラップ）、事実本意な認識と理解をおこなうよう努力されています。その結果、人里周辺のヒグマの移動範囲や行動パターンも、時間を含めてわかってきています。これらをもとに、風説・噂・思い込みからではない事実に基づいた合理的な対策がめざされています。

ちょっと疑問！クマ用の防備って？

農地でクマを防ぐ方法は、現在は電気柵です。電気柵をクマ用にしっかり張ってメンテナンスできていれば、まず100%クマの侵入は防げます。メンテナンスとは概ね漏電防止の管理ですが、それは慣れないと見ただけではわかりません。クマ用の設置かどうかは、電気柵の最下段を見ればわかります。北海道では、最下段のワイヤーが地面から20cm以内ならクマ用。それより広ければシカ用です。電気柵と言っても、それぞれの野生動物に対してそれぞれの適した張り方があるので、当然ながらシカ用電気柵ではクマに対して十分な効果は期待できません。現在では、下から20-40-70cmという3段の電気柵が「クマを確実に防ぎ、シカもまあまあ防ぐ電気柵」ということがわかっています。シカ・クマは電気柵を使えば比較的防ぐのは簡単ですが、本州ではシカ・クマに加え、イノシシ・サル・ハクビシンなど防ぐのが難しい野生動物が多いので、農地へ行って柵を見れば、周辺の山にどんな野生動物が暮らしているか、だいたいわかります。

■「あそぶ」遊ぶ＝経験する・学ぶ

「あそぶ」というのは、人間の子供同様、あれこれやりながら体験し、いろいろを学ぶということです。ヒグマの知能はイヌと霊長類（サルや人）の間にあるとされ、その高知能なヒグマの学習能力は非常に高いものとなっています。例えば人里に降りたら「おいしいものが食べ放題だぞ」「危険はないぞ」と学習したり、逆に、「これは危険だぞ」「痛い思いをするぞ」と学習したり、そういうトライ＆エラーの学習が積み重なってそれぞれのヒグマは成長していきます。特に若いヒグマは経験が浅くいろいろを学んでいる途中のクマなので、悪い学習も悪い学習も比較的すんなりおこなって、行動を変えます。人間と同じですね。昨今人里周りで増えた若グマに関しては、従来の「見かけたら即射殺」という流れではなく、まず電気柵・追い払いなどの教育的手法で人にとって好ましい学習をさせていくのが合理的かと思えます。



「くう」と「あそぶ」を同時に楽しむ若グマ

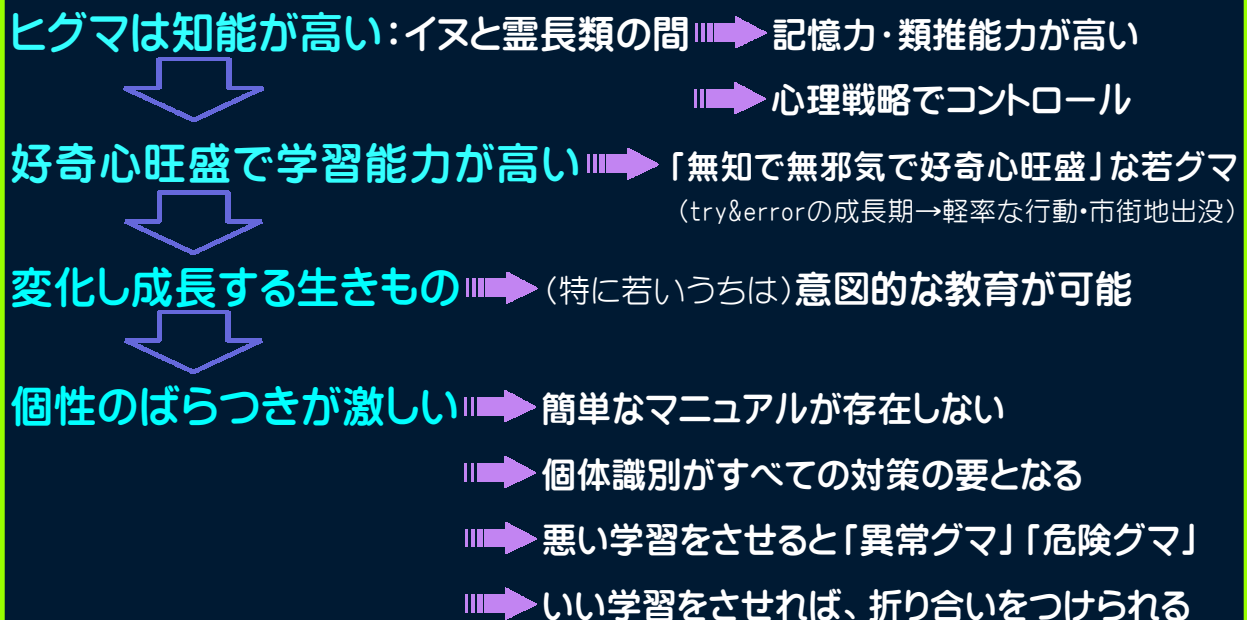
特に「仔熊」「若グマ」にとって、すべての「あそび」は、そこで生き抜いていくための学習に結びつく大切な作業です。

また、「ヒグマの高知能」は「ヒグマの高感受性」につながっています。経験によって培われた戦略・気性・癖の他に、そのときどきの喜怒哀楽、不安や切迫観などの「気分」が加わってヒグマの行動は変幻自在に変化します。

Hint!! ヒグマの知能レベルから、犬を飼ったことのある方は、犬からいろいろな類推ができます。生まれた仔犬は飼われるそれぞれの環境でいろいろを経験、学習し、変化・成長していきますね。この「成長」という点でヒグマはヒトにも酷似する部分もあり、しつけ・教育という手法が的外れでないことは、比較的理解しやすいのではないかと思います。例えば、「クマは危険か？」という命題は、「犬は危険か？」「人は危険か？」という命題と同じです。観光客の数が膨大で、なおかつヒグマの大生息地であるアラスカでは、前世紀、犬に噛み殺された人が、ヒグマに攻撃され死亡した人の8倍ほどいる計算になります。示唆に富む事実ではないでしょうか。

下の図は、「ヒグマは高知能」から始まるフロー図で、「インテリジェンス・フロー」なんて呼んでいますが、この図の中に、ヒグマと折り合いをつけるための様々な合理的ヒントが隠されています。例えば、これを「食いしん坊なヒグマ」と合わせて考えることで、私たちがヒグマの暮らす山に入っていくときに何をすべきか？あるいは、ヒグマの生息地周辺でどう工夫をしないといけないか？が、はっきり見えてきます。

ヒグマの基本——インテリジェンス・フロー



#Advance

ヒグマ、特に人里周りに暮らしはじめた若グマに必要な学習とは二つあります。

1. 人間に対する警戒心と忌避
2. 人里に対する警戒心と忌避

「忌避(きひ)」というのは「嫌がって避ける」というような意味で「恐怖」とは少し異なります。「近づかなければ大丈夫」「(不注意で)近づいても、逃げれば大丈夫」という心理でしょう。この忌避心理を、どうやってクマの側に刷り込んで人間と人里から一定の距離を保たせるかが問題ですが、それを「若グマの忌避教育」と呼んでいます。

「いこいの森」周辺や武利岳・平山の登山道などのアウトドア・エリアでは、人と遇ってもフラフラと無邪気に振る舞ったりする特に警戒心が乏しいと思われる若グマに対して「追い払い」をおこなうことで、逃げ癖・遠ざかり癖をつけるようにしつつ、「逃げれば大丈夫」「隠れてじっとしていれば大丈夫」を教える努力がされています。

す。今ある方法としては、威嚇弾(ゴム弾・花火弾)・轟音玉・ベアドッグ・ベアスプレーなどがあります。

一方、人里への忌避も、**バッファスペース**(緩衝帯＝整備され、藪のない見通しのいい空間)、**電気柵**を中心にいろいろな方法の合わせ技になりますが、基本的に、ヒグマの好適なエサ場となりうる場所があれば、しっかりクマ用の電気柵を回して防除する以外、ヒグマに里を嫌がって降りなくさせることは、まず困難でしょう。

ヒトが接近すれば速やかに遠ざかる。人里へ降りておいしいものを食べたりしない。この二つを徐々にでもヒグマ側の実現していけば、農地の被害は解消へ向かい、ヒグマを殺すことも少なくでき、なおかつ人里とその周辺での住民や観光客の安全性が高まると考えられます。

ヒグマほどの強獣との共生・共存は、一般にはなかなかイメージしにくいものですが、この二つの教育をいかに効果的にこなっていくかにかかっているのではないのでしょうか。

ちょっと疑問！クマは殺せば減るのでは？

北海道の従来的な考えで単純に考えれば、そうなります。が、実際は、特に周辺の山が広大で豊かなヒグマの生息地の場合はそうならず、逆に捕獲したエリア、つまり人里周辺で局所的に増えてしまう可能性が高いことが調査研究でわかってきました。仮に1頭のクマが人里周りの沢を中心に暮らしているとします。その1頭を捕獲すると、直後は当然 $1-1=0$ 頭となりますが、問題は、クマを1頭捕獲して空いた空間がそのままクマ不在の空間として続くかどうかです。

じつは、しばらくすると空いた空間には周辺の山から別のクマが入ってきて活動をはじめます。ところが、捕獲したクマがそのエリアでそれなりに優位なクマだったりすると、新しく空いた空間に入って来るクマは3頭にも4頭にもなり、そのすべてがもともといたクマより弱い個体、つまりメス熊や若グマになります。丸瀬布のある事例では、その増加にかかる時間は最小で1年半ほどでした。さらに、新しい若い個体がメスならば、そこで子を産み育てますから、2年ほどでさらに若グマの数は増えます。ヒグマ用の防除が遅れ軌轢が高じている地域では、先述のヒグマの生態より「農業被害＝援助」という側面を持ちますから、メス熊は山の実の豊凶に関わらず農作物で十分な食い溜めをおこなって順調に仔熊を生む可能性が高いでしょう。これらの結果、捕獲から3～4年後には、 $1-1=5$ という数式が成り立ってしまうこともあります。

若グマは人里や人の経験が浅く学習最中のクマですから、警戒心がまだまだ薄いクマです。ですから、若グマが一頭増えただけでもフラフラうろちょろと歩き回ったりして目撃・出没・遭遇がそのエリアで増えるのが普通ですが、実際にあった上のケースでは、若グマが数頭一気に人里周りに増えたことになり(5倍)、目撃・遭遇や出没は数が跳ね上がるようになりました。また、警戒心がまだ十分育っていない若いメスが仔熊を育てると、その仔熊も無警戒な性質・行動パターンになりがちです(ヒグマの母系伝承)。

人にとっては、若グマゆえの無警戒が危険なこともありますし、人里の農地で防除が進んでいなければ被害も増えます。さらに市街地出没・人家周りへの出没など、それまで起きなかった出没も起きやすくなるため、このような捕獲を「無分別な捕獲」とか「無闇(むやみ)な捕獲」などと呼んでいます。無闇なヒグマの捕獲を人里周りのあちこちでおこなっていたらどのような状況が生まれるかは、想像に難くないと思います。

もちろん、人里周りで局所的に増えた若グマに対して再び「無闇な捕獲」をおこなっても、ほとんど効果は得られず堂々巡りに陥る可能性が高いでしょう。上のフローからも、ヒトのかく乱によってヒグマの入れ替わりの激しい地域では、人里および周辺の安全性の確保も、まず困難です。

さて、どうしましょう？———ここが、今後の北海道のヒグマ対策の一つの焦点でしょうが、キーは「殺して取り除く」から「生かして(好ましく)育てる」への意識と対策の転換だと思われます。

近年の北海道では上のような事情がからみ、特に捕獲の多い地域周辺では、総じて次のようなことが言えます。

ヒグマは「山親爺」「山の忍者」などと異名をとるが……

じつは現在、人里周り・農地周りに意外と多く活動する。

対ヒグマ戦略

ごく正常なヒグマが山に豊かに暮らしていることは、いいことか悪いことかといえば、まあ現代では間違いなくいいことでしょう。ただ、そのヒグマが人里に降りて農作物やゴミを食べたり、山で会った人を怪我させたりするのは、ヒトの英知と工夫で防いでいかななくてはなりません。昨今では、クルマを運転していてヒグマを見かけることも昔より随分多くなりましたが、散歩・ハイキングの最中に双方の不注意から起きるバッタリ遭遇は避けたいところです。特に30m以内の至近距離遭遇は厄介ですが、これはヒト側の意識の持ちようでほとんど回避できます。そのためには、次の二点が基本となります。

1. ヒグマの存在を意識して行動する
2. 「遇ったらどうするか」ではなく「遇わないためにどうするか」に意識をおく

ヒトが接近した場合のヒグマ側の戦略は？

1. 前もって遠ざかる……「大半」: ヒトは認知できないことが多い
2. そそくさと逃げ去る……「たびたび」: ササの音だけで認知できる場合がある
3. ササ藪に潜む……「意外と多い」: いったんこの戦略に持ち込むと相当動かない
距離が縮まり切迫すると——
4. 近距離からの大逃亡……「たまに」: 潜み切れず、あたりをけちらかしての逃亡
5. 威嚇攻撃 (bluff charge) = 「はったり突進」……「ごく稀」
6. 本攻撃 (real attack) ……「ごくごく稀」: よほどの状況でなければ、ほとんどない

補足) 1～5までは、ヒトと衝突しないためのヒグマ側の平和的戦略で、猛然とおこなわれる「5. bluff charge」でさえ、ヒトとの完全衝突を避けるためのヒグマなりのボディランゲージで、ヒグマによる突進のほとんどがこれだと思います。ただ、残念ながら、ヒグマが突進を開始したその瞬間に、それが「bluff(はったり)」であるか「real(本気)」であるかはハンターでさえほとんど判別できる人はいないので、一般には、極めて小さな可能性ではありますが、突進開始と同時にreal attackを想定して対応する必要があります。

#Message

このパンフレットは、ヒグマの存在を軽く見て悶着につながらないように、かつ、ヒステリックにこの野生動物を恐れないように、冷静にありのままを書く努力をしています。ヒグマと聞くと「どう猛」「凶暴」とイメージされる方も多いと思いますが、ヒグマは原則的に臆病で警戒心が強く、ヒトを避けて行動します。それで、北海道では「夜行性」と思われることも多いわけです。私がかつて、ベアスプレー(熊撃退スプレー)を持ってヒグマの調査をしていた頃、曖昧に気配を感じ取っていた近隣のヒグマの存在が、じつは想像よりかなり多いと、ベアドッグ(クマ対策犬)を連れるようになって判りました。ほとんどのヒグマは、ヒトに対して遠慮がちに隠れながらひっそり暮らしているものですが、先述の理由で人里周りに増えた若グマの一部は、まだヒトに対しての警戒心も希薄で、興味深そうにこちらを見ていたりすることがあるかも知れません。またヒグマは、ヒトから比べると比較にならないくらい攻撃性の低い動物ですが、追い詰めて切羽詰まらせると豪快なbluff chargeも起こしますし、対応をよほど間違えば絶対にreal attackがないとも言えません。

——軽んずることなく、無闇に恐れ過ぎることなく、敬意を払うべきところは敬意を払い、恐れるところは恐れる——これを是非実践していただけたらと願います。

ヒグマとバツタリ出遭わないために

このノウハウは、詳細を描けば非常に多岐に渡りますが、ここでは、最も気をつけたい8か条をピックアップしました。

1. 朝夕はヒグマに遭遇しやすい——基本的にはヒグマはヒトを避ける

——霧・強雨・強風など、五感が利かないときも要注意！また、農地・人里周辺では特に早朝にはヒグマとの遭遇が起こりやすい。

2. 人の存在をアピール！——ヒグマ側に選択を委ねる

——声と拍手、クマよけの鈴などで、常にヒトの存在をアピールしながら歩く。ただ、鈴・ベルの場合は、自動的に鳴ることで油断しがちなので要注意。爆竹などは、近くのクマを驚かせるのであまりお勧めしない。「ほーい！」とか声をあげるほうが気軽なのでおすすめ。

3. ゴミ捨て厳禁！——危険なヒグマを作らない

——野生動物にとって人為食物は麻薬的に働く表現しても過言ではない。食物の管理は厳格に！ 仮に捨てた人がそのまま帰っても、あとから訪れた人が危険な目に会うこともある。ポイ捨てのゴミなどを食べて味をしめたヒグマは、その後、人が来るたびに接近し、つきまといを起こす可能性もあり、危険。

4. 「甘い香り」を持ち込まない——ヒグマを刺激しない・誘引しない

——ヒグマの嗅覚はイヌの数倍鋭敏とされ、「嗅覚の動物」と呼ばれている。香水(コロン・トニック)・化粧品・飲食物など香料を含むものは近くのヒグマを刺激あるいは誘引するので、ヒグマの生息地には可能な限り持ち込まないようにする。

5. グループで行動し、ばらけない——ヒグマは人の数を認知する

——大人4人以上でまとまって行動しているグループに攻撃を仕掛けるヒグマは、北米とデータを合わせても極めて希。グループ行動は騒がしくなりやすく、自然にヒグマを遠ざける傾向もある。もし万が一悪い状況でヒグマに遭遇しても決してばらけず、「手をつなぐ」という方法も有効。これはメンバーがパニックってばらけないための方法論でありつつ、心理的効果も高い。

6. ヒグマのサインを見落とすな！——五感を使って歩く

——ヒグマの痕跡がどういうものかある程度知っておき、糞・食痕・足跡・爪痕・罾道(くまみち)などに注意しよう。特にエサ場となっている場所の周辺は遭遇の可能性が高い。

7. 悠々とゆっくり歩く——ヒグマの「潜む戦略」を成り立たせてやる

——藪近くでトリッキーな動きを起こさず、一定スピードでゆるゆる歩くのが基本。ただし、よく登山者にあるように下を向いたままただ歩くのは好ましくない。ジョギングやサイクリングは、音がしないわりにヒグマに急に近づき驚かせるので避ける。

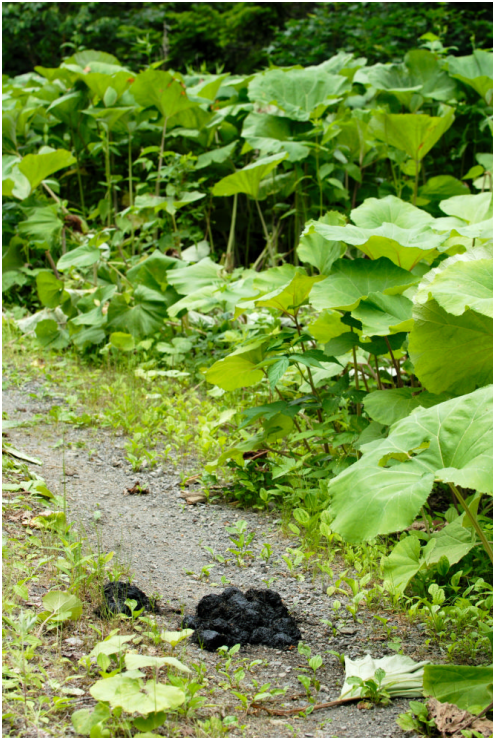
犬はトラブルの元——また、一般の犬(対ヒグマ訓練をしっかりと施されていない犬)は、せっかく隠れてじっとしてしてくれるヒグマとトラブルのタネになるので、原則的に連れ歩かない。もし連れ歩く場合も決してリードは離さず、仮にイヌが異常な反応を示した場合は引き返す判断も必要。

8. シカ死骸からは、来た道を速やかに退避！

——ヒグマは一度に食べきれないシカの死骸に土や草をかけて温存し、見張るように近隣に潜むことが多い。シカの死骸についてヒグマは攻撃性が高くなるため危険。仮にまだヒグマがついていないシカ死骸でも、においによって接近している可能性が高いので、長居は無用。

ヒグマのサイン(痕跡)

ヒグマのサインには、足跡・食痕(食べ跡)・糞・樹印(樹の爪痕)などがあります。



左は6・7月によく見られる風景。ヒグマがフキを食べたあとと、その糞です。ヒグマは春先から各種新芽を食べ、その後もフキ・セリ科の植物などを中心に食べますが、草本を食べた時の糞は、上のような真っ黒になるので「黒フン」なんて呼んでいます。



(←)ヒグマがフキを食べた跡です。特徴的なのは、繊維が糸を引いたように残るところです。シカは草食獣ですからフキの繊維も「噛み切れる」歯とアゴを持っていますが、ヒグマはもともと肉食獣なので、フキのように繊維が強い草は噛みきれず、「噛みちぎる」形になり、このような跡となって残ります。

ほかに、ヒグマは木の実類が大好きです(↓)



ブルーベリー類



ラズベリー類



トングリ類



クランベリー類 (こけもも)



(←) 写真ではわかりづらいかも知れませんが、左のアスファルト上の糞には、カラマツの葉が含まれています。が、カラマツの葉は混入物で、地面から何かを拾い食い、または舐めとって食べた証拠です。この手の糞の多くには、アリやアリのさなぎが入っています。



(↑) カラフルなモザイク状の糞は典型的な秋の糞ですが、これからも判るように、ヒグマの糞の色というのは食べたものによって変幻自在です。シカを食べたあとの糞には毛やひづめが混入していますし、ハチ・ドングリを食べれば消化されないハチ・ドングリが含まれています。



(←) これはデントコーン畑の中に続く小道のようなのですが、農家や釣り人が使っている道ではありません。比較的大型のオス成獣などが頻繁に使っているうちに、このような明瞭な空間ができていきます。このような通り跡を見つけたら、決して中に入っていくべきではありません。一方で、小型のクマがコーン畑に出入りしている場合には、ほとんど判らない場合も多いので、通り跡がないからクマが入っていないと思うのは危険です。



(←) 糞は当然こうなります・・・

デントコーンの栄養価が最も高く甘いのは受粉から40日前後の黄熟期と呼ばれる時期(この地域では8月下旬～9月上旬)ですが、ヒグマはその時期に本格的にコーンを食べ始めます。逆に、ヒグマがそうやって食べ始めたな、と思ったらすぐ刈り取れば、最もお得な収穫ができますね♥

足跡・トラック



右の足跡は道道を横断してデントコーン農地に入っている足跡ですが、さすがに急いでいるため、前足のかかとはついていません。足跡列については、ブラブラ歩く状態から「小走り」「突進」などまで千差万別ですが、その観察から、その足跡をつけたときのヒグマの心理がある程度読めます。

例えばこの写真のクマなら、前掌幅12cm、夜間に降りていること、そしてこの足跡列の乱れから、若いながらにそれなりに警戒心を持って行動している個体と推測できます。

糞ギャラリーのようになってきたので、このへんで別の痕跡にいきましょう。

(←)これは、春先の調査で、なごり雪がうっすら積もったときのニアミス時の足跡列写真ですが、ヒグマ側がまだ私に気付く前の、ブラブラと穏やかに歩く歩調です。一番下の足跡の下にうっすらと雪の窪みができていますね？これを「前足のかかと」なんて呼んでいますが、この跡がつく場合は必ず足跡の外側につきます。ですから、一番下の足跡が右の前足ということになります。

人間の足跡のように縦長のほうが後ろ足です。

アスファルトや土についた足跡も、だいたい同じような感じになります。

前足の手のひらの幅を「前掌幅(ぜんしょうふく)」といい、通常、ヒグマの足跡を測る場合は前掌幅を測ります。データ的に北海道のメスの前掌幅は14.5cmより大きくならないことがほとんどなので、仮に前掌幅15cmの足跡が見つかれば、それはまずオスの足跡と判ります。

北海道では、「大きな足跡があった」と言いつつ測る場所がバラバラなので比較や推定ができないことが多いですが、ヒグマの足跡を見つけたら、前掌幅を見るようにするといいいでしょう。コインを置いてデジカメで上のほうから一枚写真を撮っておくと、あとからでも前掌幅を出せます。



樹印(きじるし)

ヒグマにはテリトリー(なわばり)というのはありませんから、オオカミやキツネのように、他個体をあるエリアから排除するためのマーキングの類は考えられません。

ヒグマが樹に爪の跡をつけるのは、まず、樹に登り降りするときでしょう。仔熊は遊びで樹に登るのが大好きで得意でもあります。秋にはマタタビ・コクワ・ヤマブドウなどのツル科の実を食べるために、ツルが巻き付いた樹に登ります。また、自分の存在をアピールするために樹に印をつけることもあるようです。この場合、「背こすり」といって、立ち上がり背中を樹にこすりつける行動も同時におこなうことが多いと思います。アピールと思われる爪痕の樹のところに行き、まじまじと樹肌を観察すると、ヒグマの毛が付いていることも多いからです。



そのほか、頻繁にあるわけではありませんが、初夏のトドマツなどは、樹皮下に独特の香りの樹液を沢山含んでいて、ヒグマは樹皮をむいてそれを舐めとることもあります。

(←)ヒグマが樹に登り降りするときに残す典型的な爪の跡ですが、手前のトドマツに登り、樹上で奥の樹に移って降りてきています。降りるときの特徴は、爪をかけて「ずり降りる」ことでしょう。通常は、一本の樹に登った跡と降りた跡が両方付きます。

(左下)トドマツの樹液を舐めたと思われる跡ですが、この樹には同じ個体(推定)が二年連続でこのような行為をしています。一見して目立つ場所に立っているトドマツであることから、アピールの要素もあるのかも知れません。

(右下)爪の幅から、まず大型オス成獣がつけた跡だとは判りましたが、ここまで意味不明に派手な爪痕は、一体何故どんなクマがつけたのか、よくわかりません。



もしも遇ってしまったら……

だいたい丸瀬布に来てクマを目撃した人は、それを嬉しそうに「人生の大殊勲」のように話しますが、クルマから目撃したり、遠くに目撃した場合は、ほとんど危険度はないでしょう。クルマを運転していたら、前方をサッとクマが横断するとか、斜面を登っていくヒグマとか、そういうクマを目撃できた人はラッキーと言っていいのではないのでしょうか。その場合、おそらく多くの人はクルマのスピードを緩め、もしかしたら停車させるかも知れませんが、しかし、そこから降りてクマの去ったほうに歩いて覗き込んだりはしないように。

さて、問題は徒歩で散策しているときに、ヒグマを見る場合です。いくつかのケースに分けて考えてみます。

ケース1:100m～300mでの目撃

野生のヒグマをこの距離で目撃できた人はむしろ幸運でしょう。ただ、決してこちらから距離を縮めないこと。ヒグマの様子を静かに観察し、ヒグマが気付かずこちらに近づくようなら、声とともに腕を高く振って人の存在をアピールします。100mという距離はヒグマの視力にとって微妙な距離で、静止したヒトを見分けられない可能性が高いと思います。(開けた場所のテストでは、85mでも見分けられなかった事例があります)また、ヒグマのダッシュ力は凄まじく、最高60km/hで走ることができます。つまり、100mという距離は、ヒグマがその気になれば10秒足らずで走り切ってしまう距離です。

ケース2:50m前後での近距離遭遇

この距離からいきなりbluff chargeをかけてくるヒグマは北海道では比較的珍しいと思いますが、慌てず騒がず、できるだけヒグマを刺激しないようにゆっくりと距離をとります。同じ50mでも、林の中では突進は起きにくく、開けた場所では起きやすいと思います。

また、釣りなどで溪流を遡行していて、仮にこの距離で同じ日に時間をあけて同じクマを見たら、そのクマはポイ捨てのゴミなどで餌付けされた「つきまといグマ」の可能性があるため、そのエリアからは速やかに退避するのが賢明です。

(→)地形の起伏・障害物に関わらず、ヒグマの走破性・運動能破・壊力は極めて高い。「その気」を起こさせないことが最善手



ケース3:30m以内のバツリ遭遇(至近距離遭遇)

この場合、ヒトはパニックに最も注意する必要がありますが、ヒグマの側がその何倍もビクビクし切迫していると思ってください。比較的bluff chargeが起きやすい距離ですが、決して走って逃げてはいけません。驚かせてしまったヒグマをなだめながら後退するのが基本だと思いますが、距離が縮まった場合はベアスプレーも有効です。確認しますが、この状態の遭遇になってしまうこと自体が大失敗なので、この期に及んで焦っても仕方なく、ある程度腹をくくって、最悪でも致命傷を避けるよう意識してください。

とはいえ…実際にヒグマが本攻撃を仕掛けてくる例は不可思議なほど希で、私自身は本攻撃を受けない工夫をしつつ500回前後はヒグマとアイコンタクトをとれる距離で対峙しましたが、bluff chargeの延長で若いクマが距離を誤って、振り回した手がフライロッドや私の手をかすめたくらいで、それらのクマも次の瞬間に一目散に逃亡しました。つまり、至近距離のバツリ遭遇から本気で私を打ち倒そうというつもりで攻撃をしてきたヒグマに、いまだ私は遇っていないわけです。私自身の経験から確率でいえば最大でも0.2%ということですが、北海道では希にヒトがヒグマの攻撃を受けるのも事実です。おそらく、その攻撃のほとんどは、事前に回避できたのではないかと思います。これに対して、餌付けされた危険グマには、一切の対話は成り立ちません。

1. まず何より慌てない！「走って逃げる」は絶対にダメ！

遭遇の瞬間、動揺するのは仕方ないでしょうが、ひるまず、刺激せず、できるだけ冷静に！そのためには、幾つかの想定に対してときどきシミュレーションをおこなっておくのが効果的でしょう。

2. 集団を崩さない

よほど追いつめない限り、集団で居るヒトに対して本攻撃を仕掛けるヒグマは皆無です。万が一、クマの側から接近してきたときも、多勢による心理的余裕が生まれ、また団結して迎撃できる可能性が高いでしょう。

3. なだめながら、ゆっくり後ずさり

驚かせ切迫させてしまったヒグマに対しては「刺激せず、なだめながら、後ずさり」というのが基本となります。おおらかに声を出すのもいいでしょうが、切迫しているヒグマをにらみつけてはいけません。アイコンタクトを近距離のヒグマに対して正面からとると、攻撃的と見なされる可能性のほうははるかに高いでしょう。斜に構えてゆっくり後ずさりしながら、立ち樹の後ろなどに身を隠します。ベアスプレーを持っている場合には、この立ち樹が盾となり、噴射のタイミングを測りやすくなります。

このバツリ遭遇では、ほとんど樹に登る余裕はないでしょう。

4. ベアスプレーによる迎撃

ヒグマとの至近距離遭遇は突発的なため、ベアスプレーは即座に使用できる位置に保持することが大切です。遭遇と同時にロックを外し噴射準備を整え、ヒグマの「突進」あるいは「接近」が見られた場合は3～4mの距離でベアスプレーを噴射します。

ベアスプレーの噴射時間は気温などによって若干差がありますが、概ね5～8秒程度なので決して早まって噴射しないこと。最も効果が現れる4m以内にヒグマが接近するまでは腹を据えて忍耐することが必要です。

ベアスプレーの撃退率に関しては、後述する若グマが好奇心・興味本位で接近する場合には、ほぼ100%の撃退率があるでしょうし、餌付けグマや親子連れの母グマ、シカ死骸の近くなど、条件によっては撃退率は下がると考えられますので、ベアスプレーといえど完全ではありません。

ただし、ナタなどの刃物に比べれば、少し遠距離で使用できますし、特に人里周りで遭遇するのは現在ほとんどが若い個体なので、ベアスプレーを勧めています。



5. うつ伏せ防御——合理的な「死んだ振り」※特に単独行動の場合

万が一、ヒグマが本攻撃を開始した場合、持っている何かを武器にして撃退する方法もありますが、長引かせると怪我はひどくなりますし、ヒグマを興奮させて攻撃が頭部に及ぶこともありますので、「うつ伏せ防御」という姿勢で地面に寝てしまうのもひとつの方法です。いわゆる死んだ振りの一種ですが、後頭部を抱え、足を適度にかけて安定させ、うつ伏せに寝る方法です。ここまでいってしまったら、少しばかりの怪我は我慢し、致命傷を防ぐことに専念します。この手段に持ち込んだら、声をあげたりせず、ひたすら防御姿勢で堪えること。攻撃がやんでヒグマが遠ざかったと思っても、しばらくその姿勢を保持してください。

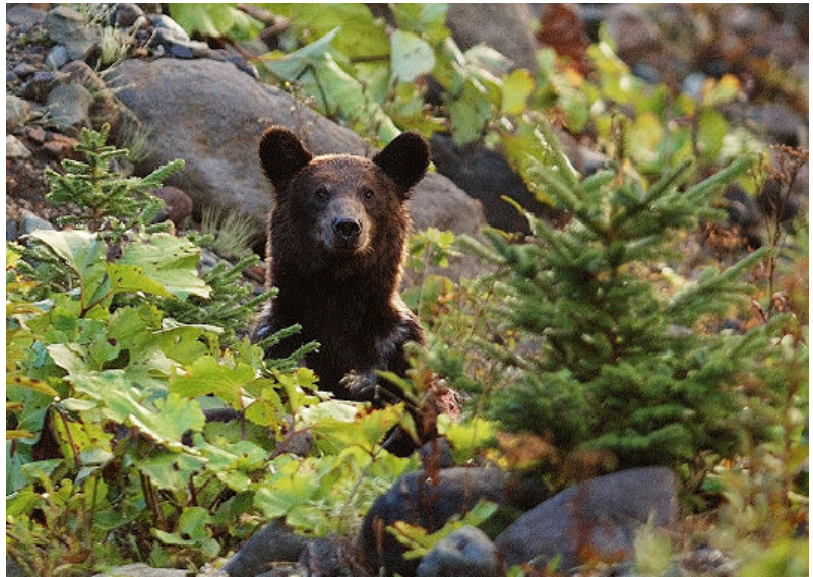


Body Language

(ボディランゲージ=ヒグマの心理の現れ方)

(↓)立ち上がる・のぞき込む

北海道で誤解の多いのが、この「クマが立ち上がる」でしょう。時に50m以上の距離でヒグマが立ち上がる場合、そのほとんどが「好奇心」もしくは「曖昧な警戒心」を抱いて情報収集をしている状態で、ヒトを襲うためではありません。



(↑)要注意！威嚇行動の初期段階

ヒトに正対し若干の上目づかいで下唇を伸ばす。これはヒグマが苛立っている証拠で、bluff chargeの前兆行動のひとつです。この状態のヒグマを不用意に刺激すると、即「突進」に移行する可能性も大です。

最近ちょっと要注意な「若グマ」と「新世代ベアーズ」

このパンフレットでも何度か触れてきた「若グマ」というのが、現在の人里周辺でのキーワードとなっています。若グマとは、親離れ後3～4年のクマで、年齢で言えば、きっちり決まっているわけではありませんが2～5歳程度のクマでしょうか。人間で言うと、小学生くらいのクマでしょう。通常の若グマは、決して凶暴・どう猛からはほど遠く、むしろ無邪気ですが、いろいろな経験が浅く無警戒なため、人との距離が近く、我々からすれば問題を起こしやすいクマと言うこともできます。

若グマの特徴は「無知で無邪気で好奇心旺盛」で、好奇心・興味で人にわざわざ近づいたり、人前でフラフラと歩き回ったり、日中の人里内をうろちょろしたり、そういう行動が見られがちです。いろいろな学習の真っ最中のクマですが、このクマに私たちが何を学ばせるかということは、非常に重要です。本気で攻撃に移ればヒグマとしての破壊力も有しているので、ヘラヘラしているからといって甘く見ることもできません。

もしこの手のクマがこちらに接近してきた場合は、「驚かせ切迫させたヒグマ」とは逆の対応が有効です。

対応1:「ガツンと一発」(ベアスプレー)※推奨

対応2:「相手にしない」(無視して立ち去る)

つまり、フラフラと接近する若グマの心理は、好奇心と警戒心がせめぎ合っている状態のことが多く、警戒心をあげてやるか、好奇心を削ぐか、どちらかの方向性になると思います。もしベアスプレーを持っていない場合は、あくまで威圧的に振る舞い、怒鳴りつけのほか、落ちていた棒あたりを激しく叩くなどの方法でも退散させることができる場合がありますが、間違っても、中途半端に迎撃して若グマの遊び心に火をつけてはいけません。この点で、最も安全な方法はベアスプレーによる撃退だと思います。

「あっ!人間だ!!」vs「あっ!クマだ!!」



(↑)(←) 好奇心と警戒心の同居(若グマの特徴)

人が接近したとき、その場所あるいは接近しながら興味津々とこちらをうかがう若グマは決して異常ではありません。いろいろな経験が浅いため、好奇心が警戒心を上回ってしまうケースですが、不用意に相手をする「じゃれつき」または「攻撃」に移行するので油断は大敵です。



「あっ!人間だ!!」

隠れた!!...つもいの若グマ

「ササに伏せて隠れる」はクマとしては正解。だけど……

北海道の山にはササがはびこっているため、ヒグマはそこに隠れることを常套手段としています。大型のオス成獣などは、ササに隠れたまま人間が5mに近づいても、じっと動かないことがあります。ヒグマの場合は、人を襲うためではなく、やり過ごしてすれ違うために隠れます。しかし、この写真のように、若いクマの場合はちょっと抜けているような場合も結構あります。この手のクマはいわゆる「危険グマ」「異常グマ」ではなく、単に経験が浅く学習最中の若グマです。この写真では、「隠れてじっとしていよう」という戦略の意識までは合格なので、このまま悪い学習をせず経験を積んでくれればいいクマだと思います。

クルマを運転していて比較的このような状況に出合いやすいと思いますが、距離が短い(50m以内)と思いますので、眺める場合も窓はしっかり閉めて、クルマから出ないようにしましょう。(クルマの強化ガラスは完全に閉まっていればクマにも簡単に割ることができませんが、爪がかかれば簡単に割れます)



「あっ！人間だ!!」



「失礼しました・・・」

ありがちな若グマの不注意

これは、追い払いのためにベアドッグと待ち構えたときの写真ですが、ヒグマの出没ルートを30mほど読み損ね、効果的な追い払いに失敗した例です。一般には、ぺちゃくちゃと喋ったり、ちゃんとヒトの存在をアピールしていれば、このようなクマの出方はありませんが、一人で静かに座って休憩などをしていると、希にこのようなことが起きます。しかし、この写真のように比較的速やかかつ穏やかに立ち去ってくれる若グマなら、いろいろを教えながら、こちらもある程度穏やかに成長を見守ってやればいいと、私などは思います。



「あっ！人間だ!!」



？隠れないのかな？



仔熊を連れた母グマは怖い？

これは北海道で昔から言われている定説ですが、遭遇した距離やこちらの態度、母グマの性質にもよります。

調査やパトロールで、樹に登っている仔熊を見落とし、母グマと仔熊の間に割り込んでしまうことがときどきあります。しかし、どの母グマも困った表情でオロオロするばかりで、これまでのところ、攻撃に移った例はありません。私は私でなにやら申し訳なく思い、仔熊が降りて母グマのところに戻りやすいように移動し、ボーッと仔熊を見ていたりします。樹の上高く登った仔熊を眺める母グマと私の構図はちょっと変ですが、ボーッとというのが利くのか、意外とこんなもんです。

一方、銃を持っていたりクルマに乗っていたりすると、人は急に気が大きくなって攻撃的になり、それに対しては、母グマは仔熊を守る防衛本能を最大限に発揮し、大型ダンブにも突進することがあります。

銃もクルマもナシのほうが、クマの本質を垣間見られるような気がします。



樹の上に仔グマがいました。



「あっ！人間だ!!」



考え事？反省してるのかな？



「追い払い」の現場から学ぶ

これは5歳程度と推定しマークしていたオス個体ですが、追い払いがスムーズにいかず、30mほどの距離からbluff chargeを許してしまった例です。日中の隠れ場所をつきとめデントコーン畑脇の藪から斜面に飛び出させたのはよかったのですが、若グマが道と平行に左右に走り回り、動きを止め、視線を外して何か考えているようなそぶりを見せたあと、突進を開始しました。

一般には、クマの動きに合わせて追い回すこともないでしょうからこのケースは特殊ですが、「動きを止めて考え事をする」というそぶりはbluff chargeの前兆の一つで、写真も珍しいので載せました。

では、もし藪に潜んでいるヒグマを不意に驚かせて飛び出させてしまったらどうすればいいでしょう？———その場合、クマを切迫あるいは怒らせているので、「刺激せず距離をとる」が正解です。

経験豊かな年長個体は、人が鈍感なことを学習していて、いったん隠れたらそんなに簡単に動きませんが、若グマは中途半端に動いてしまうことが比較的好くあります。



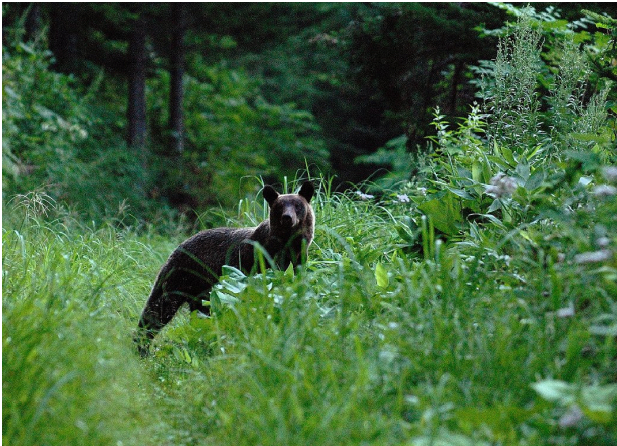
フラフラチャージ！

反省してない！

「新世代ベアーズ」って？

「新世代ベアーズ」とは、知床・大雪などの観光地に昨今出現しているヒトに慣れて、ヒトの存在を無視してマイペースで行動するようなクマの総称で、同じく警戒心が薄らいだ「餌付けグマ」とはまったく異なります。丸瀬布周辺には、今のところ明らかな新世代タイプは出現していません。若く警戒心のまだ乏しいクマに対しては、調査等で把握し、ベアドッグなども用いて積極的に追い払いなどをおこなっているため出現しにくいと考えられますが、可能性として念頭に置いておくことをおすすめします。実際、ちょっと見では「新世代ベアーズ」と「単に経験の浅い若グマ」は、見分けるのが難しいですが、テストの方法はいろいろあります。例えば———仮に一頭目のクマがこちらに向かって歩いてきたとき、うしろに後ずさりせず、横に道をあけます。そのときに、そのまま進路を変えず歩き続けければ新世代型。歩様を変え止まったりこちらをしきりに注目した場合は、概ね単なる興味本意な若グマということになります。新世代型に対してはとにかく道をあげ距離をとる。若グマは好奇心でフラフラと近寄っているのでガツンと迎撃、という対応方向になるでしょう。

では、実際にあった例をもとに、クイズをしましょう。次の写真の状況でクマを見たときどうすればいいでしょうか？新世代型の可能性を含めて考えてみてください。もちろん、絶対的な正解はありません。



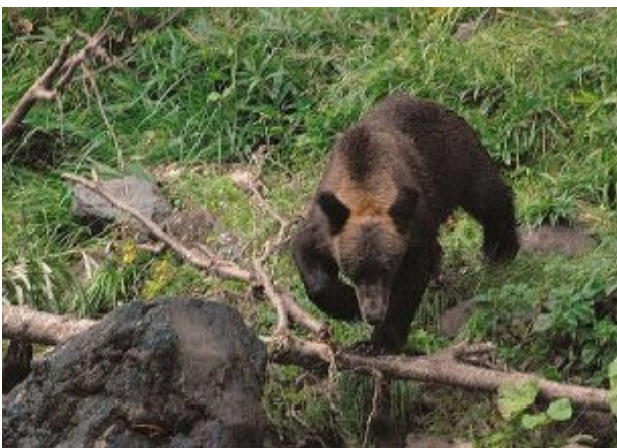
状況1)釣りを終え、溪流からクルマに戻ろうとしたら前方50mにこのようなクマが現れた。

捉え方)足を止め、耳をパラボラアンテナのようにこちらに向けていることから、こちらの情報を収集している。新世代型の可能性は低く、若グマの可能性が濃厚。ここから、ウロウロしたり、キョロキョロあたりを見回したりしながらフラフラ、コソコソと近づいて来たとすれば、好奇心いっぱいの若グマにまず間違いない。怒鳴る準備をし、ベアスプレーがあればロックを外し迎撃の構えを。



状況2)人里からかなり離れた牧草地へ行ったら、牧草地の奥、距離100mほどにこんなクマがいた。

捉え方)まず、クマがこちらに気がついていない可能性が高い。クルマがあればそこから離れず傍観してもいいが、無い場合、もしこのクマがこちらに進路をとって歩き出したら、速やかに大声を出し、手を大きく振ってこちらの存在を知らせてやる。それでおそらく、奥の藪に身を隠すだろう。



状況3)目がチラリと合ったクマが、距離50mほどから軽快な足取りでこちらに向かってきた。

捉え方)新世代型の可能性がなくはないため、横に道を譲りながら後ずさり。それで、クマが進路を変えずマイペースで歩き続ければ新世代タイプの可能性があり、そのまま進路を譲ってやり過ごす。

足を止めてこちらをうかがったりする場合は、単なる若グマの可能性が高いので、状況1と同じ対応。

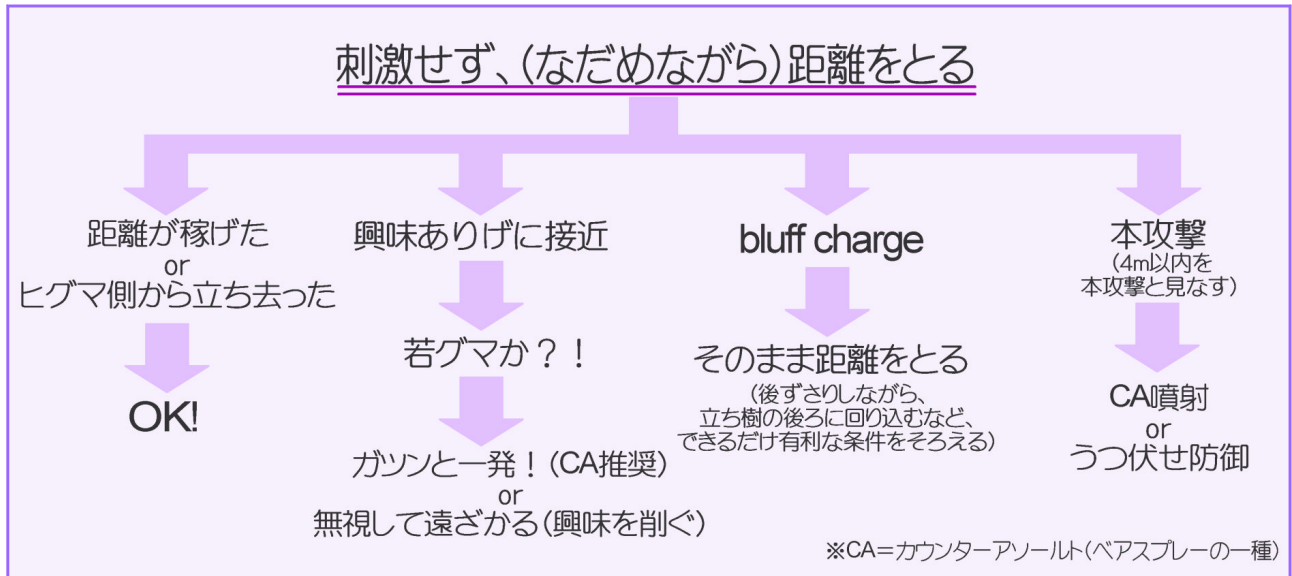


状況4)一度50mで向き合った大きなクマが、そのまま尻を見せて穏やかに遠ざかった。

捉え方)背後に人を置いて悠々と歩いているのは、それなりに余裕がある証拠。恐らく、こちらに敵意・攻撃性なく危険な相手でないと、豊かな経験から悟ったのだろう。そのままクマを静かに見送ってやるのでいい。

大型のオス成獣は警戒心が強く、滅多にお目にかかれないが、いざ遇ってみると、開き直るのか、このように悠々と振る舞ったりすること多い。

まとめ:「バッタリ遭遇」対応(若グマ含む)



「いこいの森」周辺で活躍するベアドッグ(クマ対策犬)



凜 (RIN) 2歳・メス(左)
魁 (KAI) 3歳・オス(右)

どちらもヒグマ対策用に育成され、単独でヒグマを山に追い払うことができます。が、人への社会化も幼少の頃より重視され、人には甘えます。

よろしくね!

Hideaway Wilderness Lab. 麗塾

